

日本古典文学全集

日本靈異記

校注・訳 中田 祝夫

小学館・刊

日本靈異記

日本古典文学全集 乙

1975年11月30日 初 版発行 ISBN4-09-657006-4
1993年6月20日 第十九版発行

校注・訳者 中 田 祝 夫

発 行 者 相 賀 昌 宏

印 刷 所 図書印刷株式会社

発 行 所 株式会社 小学館

〒101 01 東京都千代田区一ツ橋 2-3-1

振替口座 東京 8 200番

編集 3230-5141

電話(03)業務 3230-5333

販売 3230-5739

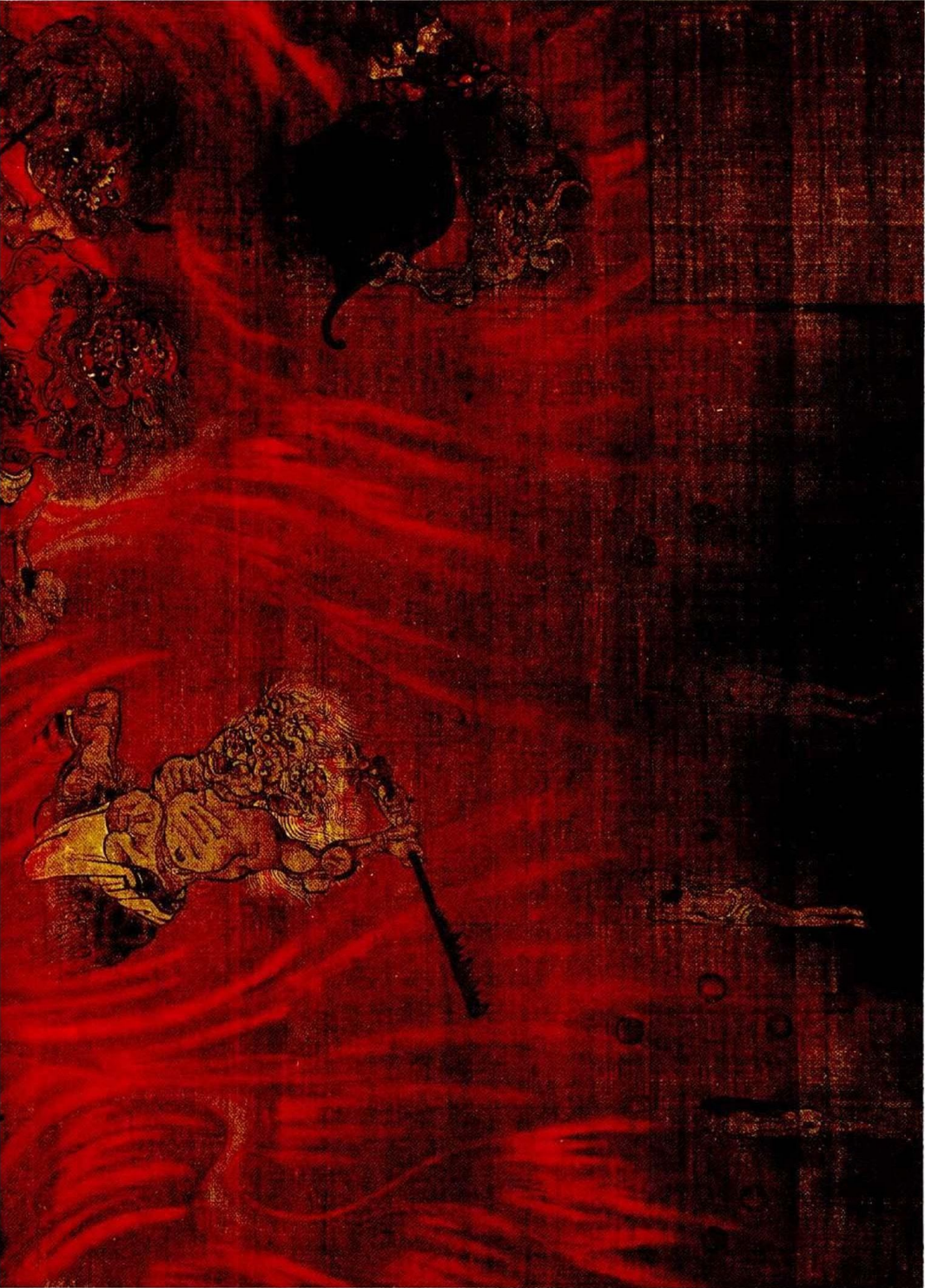
© N. Nakada 1975

(著者検印は省略
いたしました)

■造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。

■本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan





十五幅一揃いの六道絵。

十五幅の内訳は、地獄四、餓鬼一、畜生一、阿修羅一、人道四、天道一、經說話二、閻魔王一である。『往生要集』の記述をもとに描いたもので、絹本着色、鎌倉時代の作である。阿鼻地獄は、無間地獄とも言い、諸地獄のうちで最も苦しい地獄である。掲載した場面は、六十四の目をもち、頭上に八つの牛頭を戴いた獄卒が、火炎の中で地獄に落ちた罪人に容赦なく刑罰を加えているところである。熱鉄の柱に縛りつけられ、口から火を吐いている者、鋭いところのある鉄棒で打たれ逃げ惑う者、裂けんばかりに口を開けられ、灼熱の鉄丸を押し込まれている者など、罪人たちの表情は秀逸である。また獄卒には、罪人に休む暇も与えず刑罰を加える不逞な心根が読みとれる。上部の、無限の空間を真逆さまに落ちてくる三人の罪人には次の場面が想像され、象徴性もすばらしい。

縦六八・二寸、横一五八・七寸。国宝。『靈異記』上巻三十話、中巻七話、下巻二十二話・二十三話参照。

鎌倉時代に造られた彩色の木像。吉祥天は一名功德天とも言われ、インドで古くから崇拝された美および幸福の女神である。日本の信仰は、称徳天皇の発願で始めた吉祥悔過会の本尊画像から始まる。吉祥天の画像は薬師寺のものが有名であるが、仏像では浄瑠璃寺のものが代表となる。日本の仏像彫刻の中で最も美しいものの一つである。この像には妙齡の女、聖女としての威厳が見られる。像高八八・五^五。重要文化財。

『靈異記』中卷十三話参照。



吉祥天像

京都・浄瑠璃寺藏



聖徳太子絵伝／部分 片岡山の飢人に会う

奈良・橘寺蔵



「聖徳太子絵伝」はかなりの数が残されている。それらには絵巻形式のものと掛幅形式のものがある。

ここに掲げた「絵伝」は、室町時代に描かれた絹本着色の掛幅である。場面が上から下へ配置したものと

下から上へ配置したものとが交互に置かれ、視点が自然に移り流れるように配慮されている。掲載の場面は全八幅中の第七幅で、太子

三十四歳「鞍作鳥に丈六を造らしむ」から四十四歳「慈恵帰国」まで十三場面が描

かれたうちの右下の部分である。太子が四十二歳の時遊観して片岡村を通られた時に、飢えた乞食に会い、

食と衣とを与えて語り合われたと伝えるところ。絵は片岡山という伝によって山を描き、語り合われている

ところ(右上)と、乞食を墓に葬っている場面(下)である。服装などは後の時代のもの。絵解きとして、庶民に理解されやすい図柄となっている。横一一七センチ。重要文化財。『靈異記』上巻四

話参照。

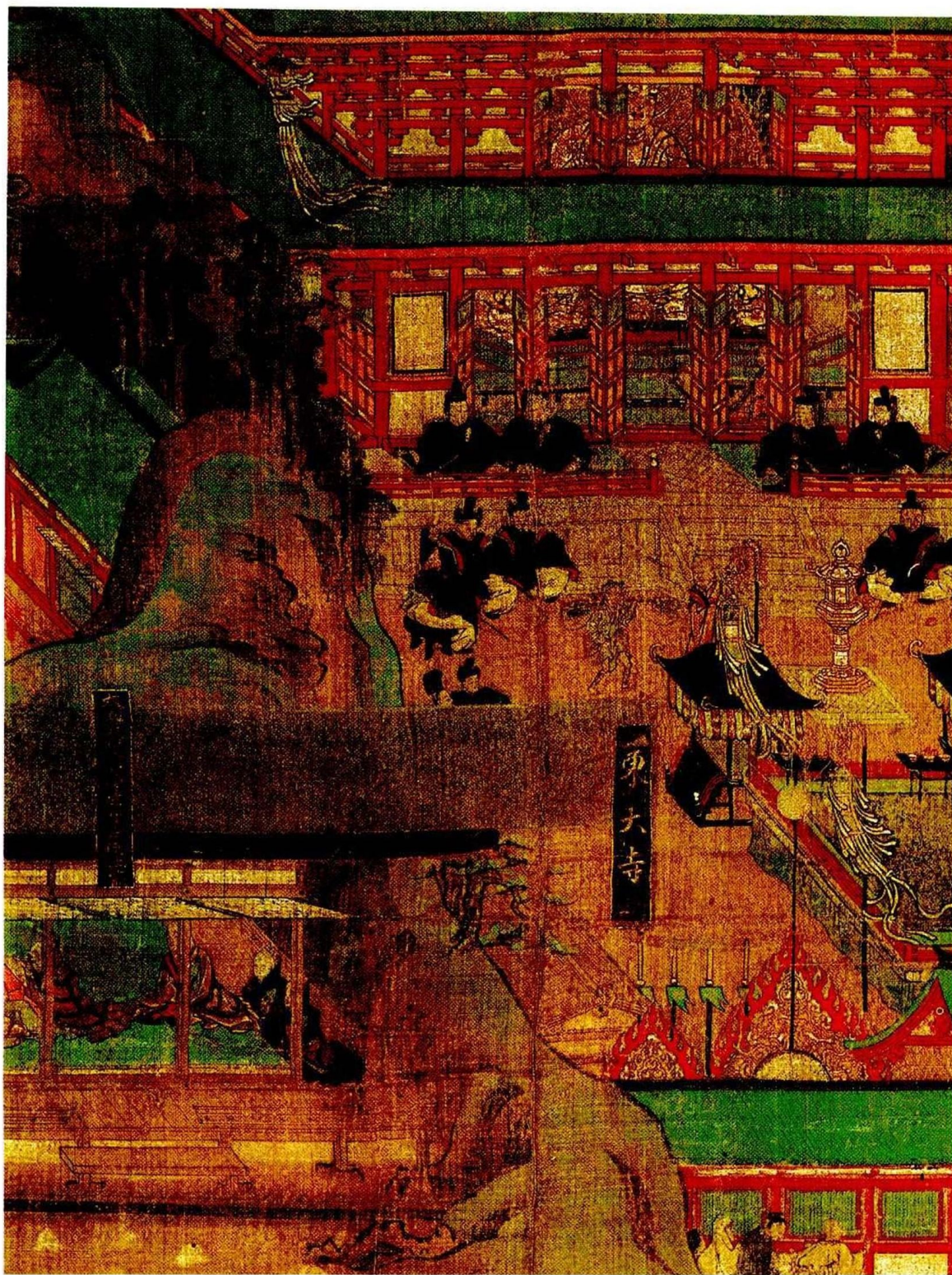


この「行基絵伝」は鎌倉時代ごろの作と言われる絹本着色、三幅の掛幅である。行基と大仏造営との関係は深い。四十年余りの間、民間にあって布教に努めた行基は、七十六歳の齢で大仏造営費の勸進に起用された。社会事業に示した手腕、募

財の巧みさを見込まれたのことであったが、それは従来の弾圧をやめて積極的に評価転換を行なうものであった。その後も朝廷は行基を異例の大僧正に任じて、竣工を急がせたほどである。絵は、第三幅「大仏殿建立」の場面、中央にいるのが

行基である。聖僧にふさわしく、立派な法衣をまとっている。なおこの絵伝の第二幅には、「頭に猪の油を塗れる女」（『靈異記』中巻二十九話）、「智光の地獄責め」（『靈異記』中巻七話）と『靈異記』の記載に関係するものもあるが、行基一

代の画期をなすので、あえてこの絵を選んだ。なお家原寺は、行基が生家の一字を捨てて道場とした寺である。横八八ヶ。『靈異記』上巻五話参照。



行基菩薩行狀絵伝／部分 大仏殿建立 大阪・家原寺蔵

役行者像

京都・聖護院蔵

室町時代ごろに描かれた
絹本着色の画像。奈良時代の
役行者は、古代の山岳信仰
仰を背景に靈界を自由に
やつることのできる呪術者
とされていた。平安時代に
入ると、山伏のように山を
めぐり歩く修行者の姿で登
場する。本来は仏教と関係





がなかったが、真言・天台の
仏徒が山に入り呪法を修行
するようになると、呪術師
として有名な役行者は、仏
教界からも尊敬されるよう
な人物となった。ここに掲
げた画像は、山伏としての
姿ではなく、怪奇な呪術者

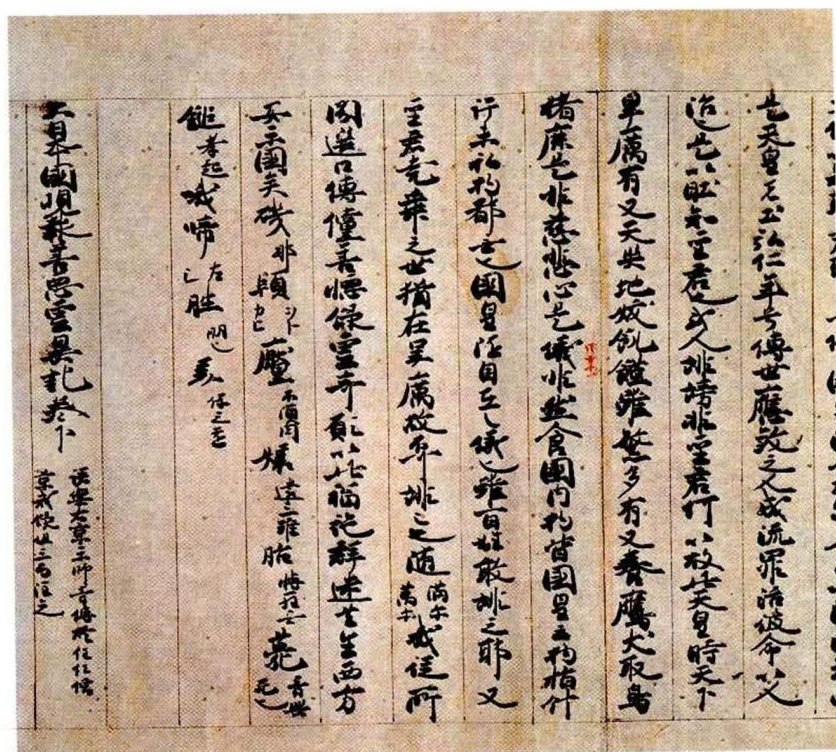
の影響も見られ、表現的で
迫力ある容貌は、呪術者と
しての面影を十分に伝えて
いる。役行者像は、頭巾を
かぶり、裾の短い衣をまと
い、高下駄をはき、岩座に
腰掛け、手には錫杖・巻物
を持つのが一般である。前
鬼・後鬼と二人の鬼を従え

るが、この絵では八大金剛
童子と虎・狼・獅子を従え
ている。縦一四七、横八
一・五。『靈異記』上巻
二十八話参照。



本書上巻の底本。金藏要集論の経文を写した紙の裏に書かれている。『靈異記』最古の伝本で、平安中期、後期ごろの書写か。掲載の

部分は序文のはじめで、卷末には、「延喜四年五月十九日午時許写已畢」とある。卷子本一軸。紙高三〇センチ。国宝。



本書中・下巻の底本。鎌倉初期ごろの書写。中・下巻のみ現存。両巻は別筆で、中巻の細目の文字に対し、下巻は肉太の書体となつて

いる。文中にある「随満尔」や末尾にある仮名の注記は訓釈として知られている。卷子本二軸。紙高二九・四センチ。重要文化財。

凡解
例說

序

序……………五

電を捉へし縁 第一……………四

狐を妻として子を生ましめし縁 第二……………三

電の恵を得て、生ましめし子の強力在りし縁 第三……………二

聖徳皇太子の異しき表を示したまひし縁 第四……………一

三宝を信敬しまつりて現報を得し縁 第五……………

観音菩薩を憑み念ぜしに彈りて、現報を得し縁 第六……………

龜の命を贖ひて放生し、現報を得て龜に助けられし縁 第七……………

響ひたる者の方広經典に帰敬しまつり、報を得て兩つの耳ながら聞えし縁 第八……………

嬰兒の鷲に擒はれて他の国にして父に逢ふこと得し縁 第九……………

子の物を偷み用ひ、牛と作りて役はれて異しき表を示しし縁 第十……………

幼き時より網を用ちて魚を捕りて、現に惡報を得し縁 第十一……………

人・畜に履まれし鬪體の、救ひ收められて靈しき表を示して、現に報いし縁 第十二……………

女人の風声なる行を好みて仙草を食ひ、現身を以て天を飛びし縁 第十三……………

僧の憶に心経を持し、現報を得て奇しき事を示しし縁 第十四……………

惡人の乞食の僧を逼して、現に惡報を得し縁 第十五……………

慈の心无くして、生ける兎の皮を剝りて、現に惡報を得し縁 第十六……………

九六

兵災に遭ひて、観音菩薩の像を信敬しまつり、現報を得し縁	第十七	七
憶に法花経を持し、現報もて奇しき表を示しし縁	第十八	九
法花経品を読む人を告りて、現に口喎斜みて悪報を得し縁	第十九	一〇
僧の湯を涌す薪を用ちて他に与へ、牛と作りて役はれ、奇しき表を示しし縁	第二十	一〇
慈の心无くして、馬に重き駄を負せ、以て現に悪報を得し縁	第二十一	一〇
勤に仏教を求学し、法を弘め物に利あらしめ、命終の時に臨みて異しき表を示しし縁	第二十二	一〇
凶人の嬪房の母を敬養せずして、以て現に悪死の報を得し縁	第二十三	一〇
凶女の生める母に孝養せずして、以て現に悪死の報を得し縁	第二十四	一一
忠臣の欲小なく、足るを知り、諸天に感ぜられて報を得、奇しき事を示しし縁	第二十五	一一
持戒の比丘の淨行を修めて、現に奇しき験力を得し縁	第二十六	一二
邪見ある仮名の沙弥の塔の木を斫きて、悪報を得し縁	第二十七	一五
孔雀王の咒法を修持して異しき験力を得、以て現に仙と作りて天を飛びし縁	第二十八	一六
邪見に乞食の沙弥の鉢を打ち破りて、以て現に悪死の報を得し縁	第二十九	一六
非理に他の物を奪ひ、悪行を為し、報を受けて奇しき事を示しし縁	第三十	一七
慇懃に観音に帰信し、福分を願ひて、以て現に大福德を得し縁	第三十一	一七
三宝に帰信して衆僧を欽仰し、誦経せしめて、現報を得し縁	第三十二	一八
妻の、死にし夫の為に願を建て、み像を図絵きしに、驗有りて火に焼けず、異しき表を示し縁	第三十三	一八
絹の衣を盗ましめて、妙現菩薩に帰願しまつり、其の絹の衣を修得せし縁	第三十四	一八
知識を締び、四恩の為に絵の仏像を作り、驗有りて、奇しき表を示しし縁	第三十五	一九
序		一九
己が高徳を好み、賤形の沙弥を刑ちて、以て現に悪死を得し縁	第一	二〇
鳥の邪淫を見て世を厭ひ、善を修せし縁	第二	二〇